

Monograph no. 9 (2021)

ISSN 1347-526

Editor in Chief : Jisen Takeshi

# Proceedings of Advanced College of Symbiosis Hakusan

手取川七ヶ用水の歴史と展望

中川 あい



Since 2001



Advanced College of Symbiosis Hakusan Press



Proc. Adv. College of Symbiosis Hakusan 21,9(2021)

©ISSN1347-526 Printed in Japan

# 七ヶ用水の歴史と展望\*

中川 あい

白山アカデミー

〒920-2152 石川県白山市明光2-14

academyofhakusan@gmail.com

## 概要

この論文は、手取扇状地に住む人々の生活と、12世紀以来、七ヶ用水の建設工事がどのように行われてきたのかに関する歴史を記述したものである。この歴史は、大きく3つの期間に分けることができる。すなわち、1903年以前、1903年から1962年の間、1962年以降である。第1期は遅くとも12世紀末に始まったと推定され、枝権兵衛は安久湊ヶ淵の5つの取水口を鑿<sup>のみ</sup>やピッケルを用いて素手で掘り、富樫用水と郷用水へ水を供給することに成功した。2番目の期間は、いわゆる明治時代のお雇い外国人の一人、オランダの河川工学者ヨハネス・デレーケの助言に基づき1903年に大水門が完成したときに始まった。そして3番目の期間に、七ヶ用水が大きく3つのグループに分けられて管理されるようになった。一番目のグループは旧富樫用水、富樫用水、そして郷用水、二番目のグループは中村用水と山島用水、そして、三番目のグループが大慶寺<sup>たいけいじ</sup>用水、中島用水、そして新砂川用水である。このように分割することにより、七ヶ用水の管理・運営は効率的かつ効果的に行われるようになった。また、七ヶ用水の本流から手取川左岸扇状地を流れる宮竹用水への逆サイフォン管路を使った分水により、七ヶ用水のインフラとしての価値は飛躍的に高められることになった。すなわち、七ヶ用水により灌漑される梯川水系の面積は、手取扇状地全体の約30%に達し、手取川水系と犀川水系に梯川水系が七ヶ用水の灌漑地域に加えられることになった。1991年5月8日、手取川・七ヶ用水土地改良組合は、中華民国台湾省嘉南<sup>かなん</sup>農田水利会とユニークな姉妹会提携することに合意した。この姉妹会提携には、石川県・金沢市出身の水利技術者・八田與一(1886-1942)が戦前台湾の烏山頭<sup>うざんとう</sup>ダムとその下流の大用水網の建設を十年間(1915-25)にわたり主任技師として台湾に献身的な貢献をした事が縁となった。

---

\*この論文は、正式に学術雑誌に掲載される前にオンラインで公表されている、下記の論文を和訳、編集したものである。

Nakagawa, T.R.M., Nakagawa, A. (2021) The Shichika Canal of Japan since the twelfth

century. Proc. of the Institution of Civil Engineers: Engineering History and Heritage, Published Online on May 28, 2021, Ahead of Print.

### 1. はじめに

図 1 は、手取川水系の全体図であり、この中に本研究対象地域の日本における位置が示めされている。

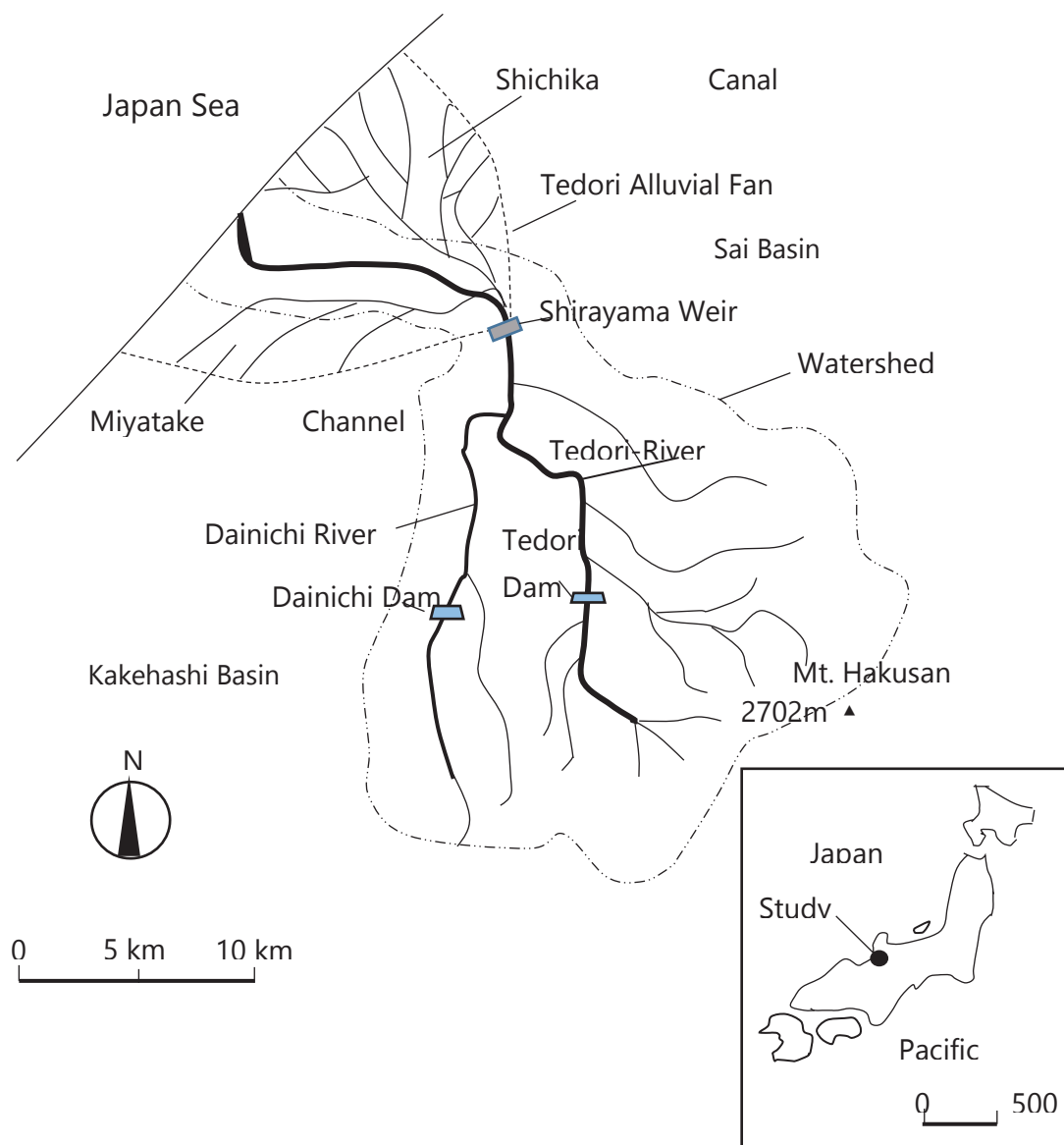


図 1 手取扇状地



図2 早春の白山

図2は、早春の白山を加賀平野・小松より遠望した写真である。この聖なる山、白山の最高峰、御前峰頂上の標高は2,702mであり、手取川は、この頂に降る雨の一滴に始まる石川平野を潤す大河である。この川は、「手取川流路七変化」と人口に膾炙<sup>かいしや</sup>されているように、歴史的に少なくとも7回、流路を大きく変えており、数億年以前に発生したと伝えられている白山の噴火以降、おびただしい浸食、土砂輸送、そして堆積という複雑な過程を経て、図3(a)に示したような手取扇状地と呼ばれる地理の教科書にしばしば参照される典型的な扇状地が形成されたものと考えられている。神話時代の白山(作本等<sup>14</sup>)に関する若干の記述が残っているものの、七ヶ用水の起源に関する資料は少ない。が、遅くとも12世紀には、この扇状地に粗末な灌漑用水が存在していたことは確実であり、白山の記<sup>1</sup>によると12世紀には、すでに安久<sup>あひく</sup>湊ヶ淵の崖の上に水戸明神<sup>みとみょうじん</sup>の社が存在していたと伝えられている。一方、十村岡野家目録<sup>12</sup>によると、富樫、郷、中村、山島、大慶寺用水は中島用水、新砂川用水よりも古い時代に掘削されていたことが判明している。

現在の七ヶ用水の一部の用水は、もともと手取扇状地の本流であった。源平盛衰記<sup>3</sup>によれば、平安時代(794~1192)後期から鎌倉時代(1192~1333)初期にかけて、大慶寺用水は手取川の本流を構成していた。しかし、この流路が南遷したため、旧大慶寺用水路は七ヶ用水の一つとして残された。また、1647年の時点で中島用水は手取川の本流であったと記されている。その後、1658年から1680年にかけてこの中島用水路はゆっくりと南下し、新砂川用水を越えて現在の手取川流路として定着し、現在に至っている。

続きは  
完成版で  
お楽しみ下さい。